# 彙報

## 京都大學文學部哲學科卒業論文題目

——昭和二十五年九月——

### 哲學專攻

占部良彦　ベルグソンに於ける主體の問題
竹尾治一郎　カント哲學と經驗論

### 心理學專攻

廣田君美　競爭の實驗社會心理的研究(一)
—就學前期兒童に於けるその發達的研究—

## 支那哲學史關係諸學會活動情況

### 一、日本中國學會大會

九月廿九、卅兩日　京都大學文學部第一教室

本會は支那哲文語學を包括する全國的統一學會として昨年結成され、其の本年度大會が右の如く當地において開催された。支那哲學に關する主要な研究發表左の如し。

哲學的研究

「古代に於ける反語表現法を通じて見たる思辨方法について」　赤塚忠
「管子幼官篇の用數數字について」　戸田豐三郎
「邵子觀物內篇の論理」　友枝龍太郎
「格物致知と華嚴學」　荒木見悟
「朱子思想のリガリズム性」　清水信良

哲學史的研究

「論易之三名」　今井宇三郎
「上代中國の典籍に見えたる君子の思想」　水澤利忠
「尚書孔傳の訓詁に關する考察」　加賀榮治
「經學史上に於ける魏の王肅」　伊藤文定
「性情論の展開」　清水潔
「聖德太子傳におけるシナ思想」　福井康順

社會史的研究

「殷代の世系と祀序」　島邦男
「俳優起源考」　池田末利
「一人兩姓考」　山田勝美

### 一、支那學會(京都)例會

六月十七日　京都大學文學部第八教室

「梁の武帝」　森三樹三郎

十一月十一日　京都大學文學部第八教室

「漢の正卒に關する二三の問題」　西田太一郎

### 一、京都大學文學部支那哲學史研究會例會

「後漢の名節」　五月廿日　本田濟

「支那に於ける人口論」　六月廿四日　湯淺幸孫
「祐祭について」　十月十五日　福永光司
「Wittfogel 氏の支那研究方法論」　十一月十八日　竹岡八雄

## 關西倫理學會の發足

戰後既に數年を經、生活の動搖は稍〻落着いたとはいへ、世相の混亂は未だに甚しく、思想對立の激化亦憂ふべきものがある。然しそれ丈に新しい倫理への反省、道德教育の確立を熱望する聲が近時とみに高まりつゝある。かゝる時、倫理學研究者並びに道德教育に深い關心を抱く人々が互に協力して斯學の綜合的研究をはかると共に國民道義の目標を明かにすることは今日の急務といふべきであろう。

この點にかんがみ、先頃より倫理學研究に携はる人々の間に倫理學會設立の要望あり、七月初め關西一圓の倫理學研究者が集り學會結成につき懇談し、此の企てを大いに推進する事に意見が一致した。この席上連絡其の他の便を考へ京都在住者に準備委員を依頼し、會結成迄の諸準備其の他の活動を擔當してもらふ事になつた。先づその第一着手として會則案を作成、七月十五日の發起人會に於て會則案を決定、十月八日（日）發會式（第一回總會）を京都大學に於て開催、こゝに關西倫理學會の發足を見るに至つた。

本會は倫理學の研究及び發達をはかると共に廣く教育者との協働により道德教育の原理の確立につとめる事を目的とし、この目的達成の爲の事業として、學會、公開講演會、研究會、會報の配布、各倫理學研究機關相互の連絡、その他本會の目的を達成するに必要な事業等が擧げられる。既に會報第一號の配布を終り、更に亦十二月十日・十一日の兩日同志社大學及京都市立朱雀第六小學校に於て研究會が催される。本會には倫理學並に道德教育に志あり、委員會の承認を經た者は入會出來、且つ團體の名を以て入會する事も出來るのである。役員には委員、監査、幹事がおかれ、任期一年の委員中より互選により委員長を選出、之が本會を代表する。當分の間事務所は京都大學文學部倫理學研究室内におかれる事になつた。委員・監査は總會に於ける會員の互選によるものであるが、然し諸般の事情より今回に限り詮衡による事になり左の通り役員が決定した。

委員　相原信作（大阪大學）、伊藤恵（奈良女子大學）、川村善久治（甲南高等學校）、坂田吉雄（京都大學）、島芳夫（京都大學）、高田武四郎（同志社大學）、田中熙（關西大學）、長谷川寅雄（姫路工業大學）、服部英次郎（名古屋大學）、平野武夫（京都學藝大學）、松原定信（滋賀大學）、室田泰一（岐阜大學）、保田清（京都大學）、山本幸雄（大阪學藝大學）、湯淺南海男（京都工藝繊維大學）

監査　小村雷敎（姫路工業大學）、世良壽男（大谷大學）

幹事　鷹阪龍夫（京都市立美術大學）、肥後政平（京都大學）、吉田忠勝（京都大學）

尙發會式當日午後一時半より京都大學文學部第一教室に於て公開講演會が行はれた。

「カント倫理說とその應用」　奈良女子大學教授　伊藤　惠
「道德的事實と社會的事實」　京都大學教授　島　芳夫

（肥後）

## 佛教學研究會

現代の日本の佛教學のあり方は極めて困難である。第一にその方法に於ける偏頗性がある。我國では梵藏原典の研究が漸く緒に就いたのみであつて、西域、東南アジアの諸言語に基く研究はなほ皆無に等しい上に、支那學との提携による漢譯佛典の批判も甚だ不十分である。ヨーロッパの東洋學が極めて廣い視野と各分野の相互援助によつて擧げて來た佛教學の諸業績を前にして我々は自らの知識の狹隘さを慚愧せざるを得ない。第二に研究精神の老化がある。十數世紀に亙る我國の佛教研究は偉大な成果を與へはしたがその生氣の枯渴を免れてゐない。現代も佛教學者のみならず多くの哲學者によつて佛教は探究されてゐるが方法の偏頗性は屢〻その探究を躓かせてゐる。近年西洋の東洋學者が新たな宗教性と平和の理念を激しい情熱を以て追及してゐることを知るならば、我々が東洋の精神の理解に於て優越を誇り得るといふ無反省な獨斷は慎しまねばならない。佛教學研究會は傳統的佛教に躊躇する事なく、廣い視野に立つて諸思想を批判し、自己の絕對的救濟が世界の救濟に通ずることを信じて佛陀の眞精神を追及するものであり、絕えず方法的反省を加へて貴重な成果を藏して眠つてゐる我國の佛教學を覺醒せしむるものである。

前佛教學主任教授久松博士の下に發足してより三年を閱した。その間の重要な行事を摘記し、特に本年度の研究會に就ては極めて簡單な要旨を記す。本會は單に研究發表の機關ではなく、研究者相互の連繫と交歡の場所であり組織的な發展を意圖してゐる。

**昭和二十三年度**　於人文科學研究所本館（以下同）

一　月　「三性說の立場」　服部正明
二　月　「報身の哲學」　梶山雄一
「名の虛妄性に就て」　常盤義伸
「眞言の本質」　佐々木龍寶
五　月　「眞如と生滅」　湖海正哉
十　月　「天臺實相論」　金剛義尙

**昭和二十四年度**

一　月　佛教學的方法の反省——中村元「東洋人の思惟方法」批評會
三　月　「神中心主義の一課題」　田部正英
五　月　長尾雅人「中觀哲學の根本的立場」批評會
六　月　同右
佐々木現順「佛教に於ける有の形而上學」批評會
この席上久松教授退官の御挨拶あり、長尾助教授が本會の指導を引繼がれた。
十　月　「天臺に於ける相對と絕對」　池山一切圓
「攝大乘論を中心とせる三性說の研究」　本庄良弘

十一月　危機神學をめぐつての談話會

**昭和二十五年度**

四月二十日

「中觀佛教の論理」　梶山雄一

中觀佛教の否定の論理が、インド古代の觀念の實體化に立つ諸哲學に對し無常なる現實性の直視から緣起說を說いた佛陀の精神に發することを强調し、觀瞢の般若燈論廣疏を利用して淸辨の論理形式を分析しつゝ、世俗の論理が根本的に肯定的であり有的であるのに對して中論のそれが否定的、無的であることを Prasajya-pratiṣedha 等の術語の具體的說明によつて述べ、中論が世俗の論理の無根據性を進道しつゝ特異な絕對否定的な勝義對法を行ふものであることを明らかにした。

五月二十四日

「唯識に於ける根據の問題」　服部正明

佛教學の課題は龍樹の宣說せる空性なる本來性に拘らず現に存在する非本來性の根據を追及することである。それを一切法の執取の所依なる阿賴耶識に求め、夢の覺醒等によつて喩せられる根據のひるがへりの自覺によつて始めて空性の了達に至る。かゝる時空性は法身、如來藏等として自己の中に agantuka（偶來）なる雜染を含みつゝそれの Viśuddhi（淨化）に於て却つて自己を成立するといふ主體的性格を帶びる。卽ち雜染の根據が根據なき根據であることに於て殊性なる根據としての空性を成立することを、初期唯識論典に準據して論じた。

十一月十一日

「成唯識論の問題」　常盤義伸

護法の成唯識論は安慧系統の無相唯識說に比して有相的な立場に立つと一般に言はれるが、必ずしも空性勝義への理解が無いわけでなく、むしろその根底に立ちつゝ道理世俗としての識論を述べるものである。それを「無始時來界」の阿賴耶識論が中心として明かにし、種子の本有新熏の問題より五性各別論に至り、無論種子の差別によつて種性の別のあらはれるといふ說は所謂決定論ではなく、無漏界を前提した上での現實界の修道上の別であることを結論した。

十二月二日

「挨拶」　江見榮義

神戸山手小學校より一年間內地留學せられた學問的精神的成果を報告せられたが、眞摯な求道的態度は深く我々を感銘せしめた。

「機の構造」　正林悟

「機」の語を法華玄義の微・關・宜に通ぜしむる解釋によつて說明し、教行信證信卷三心釋を中心に親鸞の自覺を述べ、特に至誠心釋の有名な轉讀の必然性を、親鸞の絕對的な自力作善の否定に求め、從つて至誠心釋が次の深心釋の第一機の深信と同一の意趣にあることを强調した。機法の關係、それと一心との連關の問題、特に機法の深信の主體としての機が考へられるかどうかが論議された。

（梶山）

# 寄贈雜誌論文目次（受領順）

## 哲學年報（九輯大學哲學研究會）第九輯（七月）

現代哲學の課題　羅澤　寛已
ハイデガーに於ける實存と無の性格　佐々木一義
玉藻朝子の所謂「多寶塔國」について　谷口　鐵雄
イデオロギー概念の展開　上田　一雄
カール・バルトに於ける「隣人愛」の問題　小橋井　澄

## 讀書春秋（國立國會圖書館內春秋會）第一卷第五號（八月）

廣告費の限界　藤山　保忠
Wealth of Nations の文體について　池本　喬

## 山口經濟學雜誌（山口大學經濟學會）第一卷第一・二號（三月）

「經濟表」以前のケネーの諸論稿について　坂田　太郎
經濟學の方法　相澤　秀一
重商主義の理論的考察
—商業資本型經濟思想の其の一—　高木　邑助
無競爭均衡論の再檢討　岡倉　伯士
ヒックスの利子決定論について　安田　充
統計方法と計量經濟學　佐藤　信吉
不當勞働行爲に關する諸問題　河野　實
社會集團の理論
—現象學派の諸學說—　上田　一雄
中國市場の選樣分析　上妻　隆榮
中國近世學校の運營
—學田を中心として—　西嶋　為此
內部監査について　近澤　弘治
宇部式組合の組織　名西　儀一

## 東洋史研究（京都大學文學部・東洋史研究會）第十一卷第一號（九月）

特輯　中國近世の資本形態
中國近世における生産資本の賃借について　宮崎　市定
清代國淮鹽業における生産組織　波多野善大
清代鑛業資本に就いて　里井彦七郎
清代における鹽業資本について　佐伯　富

## 經商論纂（中央大學經濟・商業學會）復刊第一號（九月）

「經濟表」と農業の生産性に關する覺書　松浦　要
ダンピングの意味するもの　油木　興吉
マーシャルにおける消費者餘剩の原理　長　守善
豫算における根本問題
—豫算均衡についての一考察—　山口　忠夫

## 一橋論叢（東京商科大學一橋學會）第二十四卷第三號（九月）

一橋大學七十五周年記念號　その二
經濟學　杉木　榮一
有效需要の原理におけるケインズとマルクス　山中篤太郎
經濟學における經濟政策　山田　雄三
新厚生經濟學の功罪　增田　四郎
中世的國家形態の變遷　板垣　興一
マキアヴェリズムの問題

## 一橋論叢（東京商科大學一橋學會）第二十四卷第四號（十月）

一橋大學七十五周年記念號　その三
法學
新改正商法についての一般的問題　田中　誠二
國際私法上における夫婦財産契約　久保岩太郎
警察の行政管理と運營管理　田上　穣治
中世ドイツ國王選擧と多數決原理　町田　實秀
I・M・C・Dへの路—海洋自由論と世界經濟　大平　善梧

## 文化（東北大學文學會）第二卷第二號（五月）

歷史主義と哲學　三宅　剛一
カント法學の立場—「美の自律性」を中心として　西田　秀穂
アリストテレスの科學論　和泉　良久
體驗の時間的構成について　坂本都留吉

## 文化（東北大學文學會）第二卷第三號（七月）

レッシングの宗教思想
—人類の教育について—　會津　伸
浪漫派詩人ノート
—ラ・マルティーヌ—　竹村　猛
マアロオ劇における死と信仰
—中世との抗爭—　松本文之亟
源氏物語に於ける宗教的內面化　小野村洋子

## 史學雜誌（東京大學文學部內史學會）第五十九編第九號（九月）

朱印船の貿易額について　岩生成一
宋代の鄉村における小都市の發展（上）　周藤吉之
—特に店・市・步を中心として—

## 人文學（同志社大學人文學會）第三輯（九月）

「文學界」と西洋文學　矢野禾積
Criticism of American Literature　Robert H. Grant
ヘミングウェイの文體について　上野直藏

## 經濟論叢（京都大學經濟學會）第六十六卷第一・二・三號（九月）

中國史上におけるデフレーションに就いて　穗積文雄
人事管理における米木問題　田杉競
經濟關係の計算とその推計學的基礎　阿部統
アダム・スミスの再生產論　松田弘三
N・バロウ「イギリス勞働組合論」　前川嘉一

## 人文學報（東京都立大學人文學會）第二號（九月）

自由の範疇　深作守文
近代的人間像の問題　高橋一郎
ヘルデルにおける世界史の構想（上）　大村晴雄
ハミルトンにおける保護主義の性格　山田信滿
ファウストの救（中）　山田幸三郎
—一キリスト者の體驗的解釋—
國語音關研究史　平山輝男

## 收書通報（國立國會圖書館）第十九號（七月）第二十號（八月）

## 讀書春秋（國立國會圖書館內春秋會）第一卷第六號（九月）

## 經濟學雜誌（大阪商科大學・同經濟研究所）第二十三卷第二號（八月）

價値論における唯物論と實存主義　森信成
—「審判理論派」的歪曲の克服—
戰後經濟發展の論理　牛尾直藏

## 一橋論叢（東京商科大學一橋學會）第二十四卷第五號（十一月）

一橋大學七十五周年記念號　その四
社會學
社會經濟史研究におけるマックス・ウェーバー　上原專祿
道德の問題における超越的方法と經驗的方法　太田可夫
技術と生產力　高島善哉
アリストテレスの「エウデモス倫理學」について　蠟井義夫
エピクロスの復活　高橋安光

## 國內出版物目錄（國立國會圖書館）第一卷第二號（九月）

## 讀書春秋（國立國會圖書館・春秋會）第一卷第七號（十月）